連載 関係からみた子どものこころと育ち

第10回 学童期統合失調症にみられる甘えのアンビバレンス

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

精神病状態を呈した小学1年生の男児

J男：初診時6歳11カ月。

家族構成：両親と弟2人の5人家族。父親は自営業。店舗は自宅を兼ね，店員の出入りも多く，いつも大人に囲まれている生活である。両親の実家も近くで交流も多い。

生育歴および現病歴：周産期から乳児期にかけて身体運動発達のマイルストーンは正常範囲だった。しかし，始語は1歳半と若干遅かった。人見知りは4カ月ころ，おむつは2歳ころにとれた。乳幼児期早期からかぜをひきやすく，こじらせて肺炎になっては入退院を繰り返していた。なにかと育てるのは大変だったという。印象深い話として，2歳になる少し前，弟の出産で母親が入院し，1週間母子分離を体験した。母親が退院したときには，母親のもとへ行くことを泣いて拒み続けたという。しかし，幼稚園時代はとくに気がかりなことはなかった。

昨年(2008年)春，地域の小学校に入学。就学後は喜んで登校したが，ただ，顔見知りの子とばかり遊んでいた。夏休みに家族で海水浴にでかけ，危うくおぼれそうになって大騒ぎとなったことがあるという。この出来事が関係していたかどうか定かではないが，9月，口元にチックが出現した。さらに眉間に皺を寄せて，ちょっとした嘘をつくようになった。

11月，急に口数が減った。ひとりでにやにや笑っている。〈いらいらするな！〉と独語様の激しい口調で言うようになった。家の中を歩き回る，ぼ～っとしている。好きな絵描きや読書もしなくなり，家族が語りかけても反応が乏しくなった。時折，空を掴むような行動もみられ始めた。朝の着替えもしなくなった。寝つきが悪くなり，目覚めも早くなった。生活全般にわたってだらしなくなった。

12月，両親は担任教諭からJ男について気になることを指摘され，受診を勧められて筆者を紹介された。最初の2回は母親のみの相談であった。

母親との2回の面接で考えたこと

J男には幼児期早期からなぜか母親に対して容易に甘えられず，強いアンビバレンスが認められた。弟出生のときの母親との再会時に見せた回避的反応は，そのことをとても印象づける内容である。小学校入学後，分離不安が再度強まっていったのであろうが，アンビバレンスが強かったために，母親に不安を吸収して

小児看護，32(03)：1806-1810，2009.

もらうことができず，不安は強まり，しだいにチック，虚言(出まかせ)，多動，緘黙，昏迷状態へと発展していったのではないかと考えられた。

初診時のJ男の様子

小柄な男の子。視線もうつろ。表情に生気がなく，自分から積極的に，自発的に行動することはない。両親に挟まれてソファに座っているが，おとなしい。筆者のそばに座るように移動を指示すると，抵抗なく移る。診察には無抵抗。なされるがままである。緘黙状態で，こちらが質問しても無反応。時折，我に戻るが，すぐにうつろになり意識の連続性がない。急に動き回ったり，手を挙げて振ったりする上肢の奇異な動きも認められた。

筆者はJ男の病態を統合失調症と診断し，両親に説明した。薬物療法を勧めると，母親は副作用を心配して拒絶的態度をとったが，父親の説得で服用することに同意した。リスペリドン1mg/日。以後，最高2mgまで増量した。両親同席での面接(週1回30分)を開始。セラピスト(男性看護師，以下TH)が加わり，主にJ男を担当した。

治療経過

●1週間後

薬物療法の効果は睡眠において顕著に認められ，熟睡できるようになり，奇異な行動も若干減少傾向にあることが報告された。ただ，気になったのは，父親がJ男の自閉的世界での独語をずいぶんと気にして，現実世界に戻そうとJ男に盛んに語りかけていることであった。母親もJ男の奇異な行動を目にすると，黙っていることができず，つい〈(そんなことをしたら)だめだよ〉と言ってしまう。すると，J男は〈いやだ！　殺す！〉と激しい口調で反応するのだが，母親が問き返すと，すぐにそれを否定するようにして〈うそうそ〉と言い直すというのである。J男の自閉的な状態の背景には彼の激しい怒りや攻撃衝動が垣間見られたので，両親には自閉的状態はもがきの表れで，彼なりの積極的な対処法だから，見ているのはつらいかもしれないが，そっと見守るようにと助言した。

J男の母親への激しいまでの怒りと，同時にそれを直接表に出せない強い罪悪感と自責感がうかがわれ，これからのJ男の治療を考えるうえで重要な指標だと感じられた。

このように，J男には母親に対する甘えをめぐる強いアンビバレンスがはたらいていることが強く推測されたが，そのことをセッションのなかでまざまざと見せつけられたのは，J男と初めて会ってから1カ月後のことであった。以下，エピソードを示す。

●第7回(1カ月半後)

しばらく一緒に過ごしていたが，J男は両親と少し離れたところのソファに横になったり，座ったりして，こちらの様子をじっと見つめている。そこで筆者は両親と離れて座っているJ男の気持ちについて考えることにした。すると2人ともすぐにそれに気づき，「以前からこの子は兄弟が下に2人いるため遠慮してきたことが大きいのだろう」と話し始めた。筆者はJ男の存在を気にかけ，彼に時折視線を向け，ソファの上でごろんと横になっているJ男の手をさりげなく触りながら面接を続けた。しばらくして，ソファに座っているJ男に向かって両手を広げて，J男を受け止める姿勢で〈おいで〉と誘ってみた。すると即座にJ男は腰を浮かしてこちらに来たそうな仕草をとったが，驚いたことに，すぐにJ男は身体を止め，何事もなかったかのようにソファに座り直したのである。

筆者はこのときのJ男の反応に非常に驚くとともに，彼のアンビバレンスの強さを再確認した。以後，筆者は彼のアンビバレンスをいかにして緩和していくかにこころを砕き，両親にもことあるごとにそのことに気づいてもらうとともに，彼のアンビバレンスを刺激しないために，こちらから意図的な指示的ことばを極力避けて，さりげなく彼の気持ちを受け止め，何をやっても大丈夫だよと彼が思えるように応じてほしいと助言した。なぜなら筆者は彼のなかに，甘えに対する罪悪感とともに，他者からの強い侵入不安を感じとっていたからであった。

幸い，両親はこれまでJ男に対して十分に気持ちをくみ取って相手をしてやらなかったという反省を述べるようになっていたため，筆者の助言を素直に受け止めた。

彼にみられるアンビバレンスはさまざまな行動によって示され，経過のなかで実に微妙に変化していったが，そのことは彼のアンビバレンスの繊細さを如実に示していた。具体的には次に示す第8回以降のセッションでの行動として表れていた。

●第8回

セッションでは，J男はソファに横になってごろごろしている

が，顔をソファに押しつけ，恥ずかしそうにしている。母親のほうに足を向けているが，「拗ねている」状態に近い。時折起き上がるが，THや筆者をじっと見つめている。その視線は見ていて少し恐ろしく感じるほどで，こちらをじっと凝視している。笑顔がみられない。堅い表情である。

家で夜寝るとき，母親，J男(長男)，弟(三男)，父親，弟(二男)の5人が横になって寝ているが，J男は父親のほうに接近したくて，父親の足元に近寄り，しだいに，父親と弟の間に分け入ろうとする。母親に対してどこか回避的傾向が続いていた。

●第9回(2カ月後)

J男は母親をよりはっきりと求めるようになり，家庭では母親を独占しようとするようになってきた。しかし，それでも母親の顔色をうかがう行動が多い。治療室でもTHの背におんぶされていても，母親のほうをちらちらと見ている。母親に抱かれたがらず，なぜかTHにずっとおんぶされようとしている。

●第10回

母親への甘えがどんどん強まり，この日はこれまでになくストレートで，最初から抱きついている。しかし，セッションが始まり，みんな一緒になると，急に母親から離れてソファに寝転がる。母親に，J男のそばに座るように指示したところ，母親はJ男の靴下の汚れが目に入り，取り除こうと靴下を脱がせようとする。人前ではストレートに母親への甘えを出せない。

THがJ男に付き合い遊び始めるが，すべり台の下にもぐっているので，ボールを出すように促すと，〈片づけなくてはいけないから(出さない)〉とすぐに反応する。この反応にも日頃J男が遊びたくても母親の意向を気にして自分の欲求を抑えていることが推測された。

ただ，J男の表情は穏やかになり，前回までの人を突き刺すような鋭い視線を送ることは，ほんの少しの時間だけになった。

●第11回

セッションの初めに，父親のほうをじっと見つめて，おもむろに父親にしがみつき抱かれている。しばらくはそうしていたが，父母が筆者と話し始めると，気を使っていつの間にか父親から離れてTHのほうに寄り，おんぶされたり，まとわりつく。しかし，両親の様子が気になり，ちらちらと時折視線を送る。

●第12回

夜，布団のなかでJ男は母親のとなりで，足や顔を逆にして，身体を母親にくっつけて寝るようになったことが母親から報告された。しかし，セッション中，母親が手を広げて抱っこしようとして誘うと，J男は母親に向かって〈飽きた！〉と冗談っぽく言って父親のほうに行った。こんなところにJ男が他者の前で甘えを抑えてしまうところが感じとられた。

●第13回(3カ月後)

母親はJ男を抱っこしてみると，以前はだらりと抱かれていたが，いまは自分からしがみつこうとする意思が感じとれるようになったとうれしそうに報告した。

●第14回

目に生命力が戻り，こちらに向ける視線も温かさを感じさせ，困惑した印象はなくなった。非言語的にも言語的にもコミュニケーションがとりやすくなり，声をかけるとすぐに反応するようになった。

筆者が前回J男を抱っこして腰がとても痛かったこと，J男がたいへん重くて驚いたことを面白おかしく父母と話していたら，それを聞いてすぐにJ男は筆者に近寄り，〈抱っこ！〉と甘えた口調で筆者におぶさってきた。筆者は馬になって背中に乗せて相手をしたが，父親が腰を痛めますよとかばってくれた。すると素直にJ男は降りた。筆者はJ男のあまりの従順さが気になった。

●第15回

セッション中，J男が走り回っていたときに，父親が制止しようとして〈待て，待て〉と言うと，さほど強い調子ではなかったが，J男は〈死ね！〉と暴言を吐くとともに，表情が急に険しくなった。彼の侵入不安の強さを改めて知らされた。しかし，好奇心は高まり，やりたいことをどんどん言うようになった。

J男は父母の前ではアンビバレントな態度を示していたが，筆者に対しては，先週よりもさらにストレートにしがみついた。べったり身体を押しつけて甘えた感じである。このことについて両親に後から印象を聞いてみた。第三者，職場の人たちには甘えやすいみたいだというのである。そこで筆者は両親に尋ねた。

「一般に子どもと親との関係は，ただ無条件に受け入れ，甘える関係とは違うでしょう。親は子に対して，いろいろと思うことがある。こうなってほしいとか，願いがある。そのため無条件に

受け止めることがむずかしいこともあるでしょう」と話すと，両親は「思い当たることがある」と言って話し始めた。弟がすぐに生まれたので，あまり相手をしてやれなかったこと，父親は昨年忙しく，抱っこを要求したときにも拒否してしまったことなどである。母親は「この子はナイーブな子だと思っていた。それなのに我慢させすぎた。抱きしめてやることが少なかった。小学校入学時，とても不安そうだった。J男は〈家にいてね〉と母親によく確認し，今日はどこに行くかとよく尋ねていた。〈弟は嫌いだ！〉ともよく言っていた。この子は甘えてはいたが，ひょっとしたら，やってもらいたいこと・やりたいことと，親がやってきたことの間で大きなずれがあったのではないかと思う」と語るようになった。

さらに，筆者は父母のやりとりを聞きながら，母親が父親の話を聞くとすぐさま，〈でも私はこう思うよ〉〈こんなこともあったよ〉〈こうじゃないの〉と父親の意見を受け止めることなく，すぐに相手の思いを塞ぐように自分の考えを先に言ってしまいやすいことを取り上げた。その際，父母の仲は良いのか悪いのかわからないと，少々冗談っぽくつけ加えた。すると，母親は，確かにそれは当たっていると述べ，父親は〈ビンゴ！〉と即座に反応した。振り返ってみると，この子が幼いころ，自分の気持ちをあまり話さないので私のほうからいろいろと先回りして言っていたと思う，と母親は過去の養育体験を回想するようになった。自分では子どものことを思ってやったことだが，J男の思いとは違っていたかもしれないと振り返った。

●第16回（5月の連休の翌週）

この連休で父子の交流が深まり，J男は安定。アンビバレンスが緩和してきていることを実感できた。うろうろと徘徊する行動が減っている。意欲が高まり，外に出たい，学校に行きたい，と言い始めている。「今日はだめ」などと母親が言うと，徘徊して独り言をぶつぶつつぶやいているが，以前のようにこちらが入り込めないような深刻なものにはなっていない。その証拠に，今日のセッションで30分くらい経ったとき，父母と筆者が面接していても，J男は周りをうろうろして独り言のようにつぶやいていた。どうした？ と父親が聞くと，すぐに〈帰りたい！〉と素直にことばにするようになった。自分の意思を相手に向かってしっかりと伝えられるようになっていた。侵入不安を感じることなく，父親の問いかけに対する反応が即座に返ってくるようにもなっていた。

その後も順調な経過をたどった。

●第26回（6カ月後）

父親はこれまでを振り返り，〈この子が本当によくなって，初めて親になったように思う。おかげで下の子（弟）もよく育つようになった。この子（J男）も私たちも出直しをすることができたと思う〉としみじみ語るとともに，そばで聞いていた母親も〈J男がどんどん自己主張するようになって，私たちはやっと黙って受け止めるようになってきた。以前はJ男が何も言わないので，私のほうがつい口を出さざるを得なかったと思う〉と素直に自分を語るのだった。

甘えをめぐるアンビバレンス

本経過を振り返ると，いかに繊細な反応を示しながら，J男のアンビバレンスが緩和していったかがわかるが，とりわけ印象的であったのが，時折唐突に発する親に向ける怒りの感情と，甘えに対する強い罪悪感と自責感であった。これまで本連載では自閉症と診断された乳幼児期の子どもに強いアンビバレンスがあることを指摘してきたが，今回の児童期統合失調症と診断された事例においては，J男自らが語ることばによってもそのことが明確に浮かび上がってきている。ただ，これまで取り上げてきた自閉症の子どもたちと対比したとき，本事例のアンビバレンスの緩和による回復過程は飛躍的で，急激な変化であった。両親との面接のなかで，J男のアンビバレンスを明確に取り上げ，過度の侵入的関与は控え，J男の気持ちに照準を合わせて相手をするように終始助言していった。

その結果，J男のアンビバレンスの緩和はさほど大きな混乱をみせず，順調に推移していったのである。

なぜアンビバレンスが強まったか

J男のアンビバレンスがこれほどまでに強まったひとつの要因として考えられたのは，第15回のセッションで筆者が取り上げた問題である。母親は相手の話を聞くと，相手の気持ちを受け止めることなく，すぐに自分の意見を押し出してしまいがちなところである。筆者は母親と話をすると，いつも自分の気持ちを受け止めてもらった実感がなく，はねのけられる感じを受けていたので，両親の対話のなかで起こった場面を取り上げて，両親に考えてもらおうと試みたのである。

このようにセッションのなかで〈いま，ここで〉起きていること

をすぐに取り上げると，相手も抵抗なくそれを受け止めることが可能になる。両親の緊張が高まることを危惧して，冗談を交えながらこの問題を取り上げたことも功を奏したのか，以後，母親は明らかに相手の話を以前よりも受け止めて聞く姿勢を見せ始めている。J男のアンビバレンスが予想以上に良好な経過で緩和していったことの背景には，このような養育者の変化も関係しているのではないかと思われるのである。

子どもにみられるいかなるこころの問題であろうと，アンビバレンスに着目することの重要性が，ここにも示唆されているのではなかろうか。

違法コピーに注意！！

そのコピーは大丈夫ですか？

現代社会において，コピー（複写）はなくてはならないものになっていますが，その手軽さゆえに違法コピーが後を絶ちません。あなたが日常的に行っているコピーは大丈夫ですか？　著作権法に定められた例外，つまり，個人または家庭内等で使うために自らコピーする場合や図書館において調査研究等のため一部分をコピーする場合（著作権法第30，31条等）のごく限られた範囲以外のコピーは，すべて著作権者の許諾を得なければ違法となります。企業や研究施設等で職務上利用するコピーはすべて許諾が必要となりますので，ご注意ください。

違法コピーは健全な創作活動，出版活動の障害となり，ひいては文化・学術の発展を阻害する大きな要因となります。今一度，著作権についてお考えください。

許諾の手続きは簡単です！

医学や関連領域の出版物の多くは，(社)出版者著作権管理機構 JCOPY に複写権の管理・運営が委託されています。複写される場合は事前に JCOPY に連絡し許諾を得てください。

JCOPY （社）出版者著作権管理機構

TEL03-3513-6969　FAX03-3513-6979　info@jcopy.or.jp

JMPA 一般社団法人 日本医書出版協会

不正なコピーは許さない！

Q&Aサイト「それは違法かも。」

「これって違法？」著作権に関するよくある質問にわかりやすくお答えしています。

http://www.ihokamo.net/

情報受付窓口「不正コピー情報ポスト」

不正コピーなど、明らかに違法なものを見つけたら、こちらまで情報をお寄せください。

https://www2.accsjp.or.jp/piracy/

フリーダイヤル　0120-765-175

ACCS

社団法人 コンピュータソフトウェア著作権協会

http://www2.accsjp.or.jp/